
絶対運命曲線

みあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶対運命曲線

【Nコード】

N1094F

【作者名】

みあ

【あらすじ】

「あなたは101人目の勇者です」少女の言葉に青年は嘆く。異世界に召喚された青年と見習い神官は魔王を倒すための旅に出る。「勇者様。もつと現実を見てください」「まさかファンタジーの住人に言われることになろうとは」彼らの旅はどんな終着へとたどり着くのか？ 勇者達の織り成す異世界ファンタジーここに開幕。何年掛かっても完結させるよ絶対。

第一話

俺はツイてない。

一体どうしてこんな状況に陥ってしまったのか。

「……と、いうわけで、この国に脅威を与えている魔王を倒してほしい。以上、聞きたいことがあれば彼女に聞きたまえ」

高台に設けられた椅子の上にふんぞり返っている痩せぎすな男が偉そうな口調で言う。

「ということで、勇者様。私と一緒に旅立ちましょう！」

俺の横には、妙なピラピラがいつぱいついた、着るのが面倒くさそうな服の女の子。

年は10代の半ばほどか、力の入った声の割にはずいぶんと華奢な体格だ。

見た目は結構可愛い方だが、病弱でいつも入退院を繰り返しているお嬢様といった雰囲気だ。

「ところで、早速聞きたいんだが」

「なんででしょうか？」

辺りを見回すと、何か教会の礼拝堂のような雰囲気。でも、それよりもなお目立つのは両側の壁に飾られた肖像画の数々。

皆、一様に俺のような現代人の衣服を身に付けている。学生服の人間もいれば、警察官の格好をしている者。

果てはナース服やなぜかトランクス一丁の男までいる。
そういう俺はセーターとジーパンの上にエプロンを羽織っている
だけだ。

「あの絵はなんだ？」

「あれは過去に召喚された勇者様方の肖像画です。皆、魔王を倒す
ためにここから旅立って行きました」

あー、俺以外にもここに来た奴がいるのか。
まあ、俺だけが選ばれる道理も無いわな。

「で、何でまた勇者の召喚なんぞしたんだ？」

「？ 魔王を倒すためですけど……？」

少女は首を傾げながら聞き返す。
そういう意味じゃない。

今のは確かに俺の聞き方が悪かった。

「過去に召喚された勇者がいるのに、どうしてまた勇者の召喚をす
る必要があるのかと聞いてるんだが」

合点がいったのか、少女の顔が晴れやかになる。

「ああ。そういうことですか。皆さん、失敗されたんです」

すまないが、そこは笑顔で言う所じゃない。

「せっかく国庫が空になるまで援助してやったのに、失敗ばかりし

おつて……」

椅子の上の男が愚痴るようにブツブツと呟く。
よく見ると、男が座っている後ろにも肖像画が飾られている。
痩せぎすの男と同じような服を着ている恰幅の良い紳士だ。
ひよっとしたら、同一人物なのかもしれない。

「失敗って、具体的には？」

少女はどこから帳面を取り出して、パラパラとめくり始める。

「えーと、最初に召喚されたのはケイサツカンのフキタさま」

ああ、あの警察官の格好した奴か。
現代人の中ではまともに勇者としてやっていけそうな人材だ。

「戦いに嫌気がさして、国庫からの援助で出たお金を元手に商売を始めるも上手く行かず。現在行方不明」

何だ、それは。

「2番目はコウコウセイのセキグチさま」

ああ、あの学生服の奴ね。
あの世代ならゲームとかやってそうだし、意外と順応しそうだな。
な。

「供をしていた神官と駆け落ち。現在2児の父親として家族のために奮闘中」

今時の若いもんは、何やってんだ。

あーそうか、ナニやってんだ。

今のは少しオッサンくさかったな……自己嫌悪。

「えー、3番目の勇者様はカンゴシのアオヤマさま。貴族と結婚後、夫が死亡。莫大な遺産を手に入れて……」

「もういいよ、ありがとう」

延々、勇者のその後を聞かされるのは心臓に悪い。

……あのトランクス一丁の男が何者なのかは気になるけど。

「で、俺は何人目の勇者様なんだ？」

「あなたは101人目の勇者様です！」

元気な少女の声に嫌気がさしてくる。

101人、よりもよって101人か。

100人とかならまだキリが良いから、何となく良い事が起こりそうな気もしないでもないが、101人か。

100人と1人って、なんかおまけみたいな感があって非常にムカつく。

「この国の政治は、100人の神官と1人の王様とで成り立ってるんです」

そう聞くと、何だか俺が王様みたいな気分だな。

だが、気分が良かったのはただの一瞬だった。

「神官1人が召喚できる勇者は生涯1人だけ。あなたが最後の希望

なのです！」

あれ？ ちょっと待てよ。

100人の神官と100人の勇者。

王様つてのは、あそこでふんぞり返ってる奴だとして、101人目の勇者を召喚したこの娘は？

「申し遅れました。私はこの国の神官見習い、メルシア・ファフネルです。メルって呼んでくださいね」

やっぱり、おまけじゃねーか！

どうすりゃいいんだよ、これから。

頭を抱えてへたり込む俺を、少女は心底不思議そうな顔で見下ろしていた。

「……いらつしゃいませー」

深夜のコンビニエンスストア。

レジには俺1人。

一緒にいたバイト仲間はデートの約束があるといって、消えた。本来なら2人で就くべきところを1人でやっているのだ。

「……ありがとうございましたー」

とはいっても、こんな寂れた場所にあるコンビニに客が来ることなんて滅多に無い。

このコンビニもすぐにつぶれてしまいそうだ。

「新しいバイト先、探そっかなー」

カウンターに寄り掛かりながらぼやいてると、外に何かの影がちらちらと蠢いている。

ひよっとして、強盗か？

手近にある武器になりそうな物は……と、壁に立てかけたモップに目がとまる。

「どうか、強盗じゃありませんよーに」

モップを両手でしっかり握り、出入り口になっている引き戸をゆっくりと開く。

すると、そこにいたのは1人の少女の姿。

寒いのか、身体を丸めるようにしてうずくまっている。

「あ？ 何だ、子供か。脅かすんじゃないよ、全く」

さっきまでビクビクしていたせいか、必要以上に声が荒くなってしまう。

「ご、ごめんなさい。……ご、め……ふえ」

しまった。

そういえば、店長にも言われてたっけ。

『君は感情がすぐに言葉に出るわねえ。気を付けないと、お客様が怖がって来てくれなくなるわよ』

うずくまって泣き出してしまった少女の姿に、店長の小言がよみがえる。

正直言って、本当に客が怖がってるとしたら、男のくせにオネエ言葉を使う店長の方だと思う。

でも、今この場でこの子を泣かせたのは間違いなく俺だ。

「しょうがねーな。ほれ、こんな所にいたら風邪ひくぞ」

泣きじゃくる少女を追い立てるようにして店の中に連れ込む。

端から見ると、警察を呼ばれても文句を言えそうにない光景だとは思ったが、背に腹は替えられない。

「うわー、ここ、あつたかい。それに夜なのに、ピカピカしてる」

ついさっきまで泣いてたくせにもう泣き止みやがった。

しかし、不思議な感想を言う奴だ。

もう冬にさしかかろうとしているこの時期に店の中に暖房がついているのは当然だ。

夜でも明るいのには現代人なら常識だ。

「なんだ？ コンビニに来たのは初めてなのか？」

「コンビニに……？ コンビニっていう街なんですか、ここ？」

いや、地名じゃなくなてな。

明るい所でよく見ると、明らかに日本人じゃないのがわかった。

金色の髪は電灯の光をキラキラと反射して輝き、青い瞳が少しだけ涙の名残を見せながら潤んでいる。

染髪とカラーコンタクトという可能性も考えたが、目鼻立ちが日本人のそれとはかけ離れている。

服装はというと、こんな寒空の下でよくこんな薄着を、と思うほど薄いペラペラの白いワンピースのみ。

……ひよつとするとヤバイ拾い物をしたんじゃないかな。こんな寂れた街角で、こんな一般常識も知らない外国人の少女。

すぐに思い付くのは頭にヤのつく商売の関係者か。何にしても早々に帰らせたほうが良さそうだな。

「コンビニ二つーのは、店の名前だよ。この街の名前は……」

そこまで答えた所で、少女の腹の虫が鳴く。

小さな音だが、客のいない深夜のコンビニでは実によく目立つ。

「あ、あの、すみません……」

消え入りそうな声で謝って来る。

視線は棚の上にあるパンに釘付けだ。

「金、持ってるのか？」

「……持ってないです。ごめんなさい」

本当にしょうがねーな。

俺はおもむろに棚の上の新発売と銘打たれたメロンパンを手にとると、封を開けて少女に手渡す。

「……あの、これは？」

「俺の奢りだ。食わねーんなら返せ」

そう言つと、少女はパンをちぎって口に運ぶ。

「美味しいです！　ありがとうございます！」

「礼はいいから、早く食べ。他の人間に見られたらヤバイだろうが」

　　「つたく、茶も出してやった方がいいだろうな。」

　　ふと、悪戯心が芽生える。

　　ジュースの棚からペットボトルを取り出し、パンを食べ終えた少女にふたを開けて手渡す。

「何ですか、これ？　すごい色してますけど、甘い匂いもする。フラガッタみたい」

「フラガッタ？　まあ、何の事が知らないけど、飲んでみるよ」

　　少女が恐る恐る口を付ける。

　　次の瞬間。

「ぴあー！　口の中がしゃわしゃわしてますー！」

　　少女はやかんの湯が沸騰したみたいな声を上げる。

　　俺はそれを聞いて、してやったりと腹を抱えて笑う。

「ひどいですよー！　こんなの飲ませるなんて！」

「悪い悪い。でも俺の奢りなんだから良いだろ？　これくらい面白い見世物もそうそうないぜ」

　　俺の奢りという部分に反応したのか、少女がもう一度コーラを口に含む。

「ぴゅあー！」

何度も同じ事を繰り返し、ようやく慣れたのか、コーラを飲み終える。

その様子を見ていた俺は笑いすぎて腹が痛い。

「くっくく。なんか一年分くらい笑った気分だ」

「むー」

不貞腐れる少女に真っ直ぐ向き直る。

そろそろ家に帰さねーとな。

いつまでもここに置いとくわけにも行かかねーし。

俺が口を開こうとしたその時、一瞬早く少女が口を開く。

「私、決めました」

何を？

返事をしようと思ったが何故か声が出ない。

少女の指が俺の額に当てられる。

「見知らぬ街に来て一昼夜。こんなに優しくしてくださったのは、あなたが初めてです」

だから？

「あなたこそ、勇者にふさわしいと私は考えます」

勇者？

一体、何の話だ？

「私の勇者様に、世界の運命を切り開く勇者様になってください」

少女の顔が近くなる。

ちよつ、まさか！

唇に柔らかな感触が押し当てられる。

周りの風景が真つ白な光に塗りつぶされていくのと同時に口の中にコーラの味がほのかに広がっていった。

空の色は黄緑色。

昼間なのに黄緑色の空には紫色の月が光っている。

非常に目が悪くなりそうな配色だ。

ここに来た時にはじめて見たこの世界の色。

俺が住んでいた世界とは明らかに違う遠い世界。

石造りの家屋が立ち並ぶ、まるでRPGを彷彿とさせる中世風の町並み。

その世界のオープンカフェのような所に俺たちはいる。

「なあ、勇者ってあんな適当に選んじやって良いのか？」

「良いんです！ アローラだって自分の好みで勇者様を選んだんですから！」

メルが顔を赤らめながら声を荒げる。

ひよっとしたら、俺と同じようにあの時の事を思い出していたのかもしれない。

「アローラ？」

初めて聞いた名前だ。

「私の2才年上の幼馴染で、100人目の勇者様を召喚した神官です」

「その娘って、美人？」

俺のその言葉に、彼女は目を吊り上げる。

「勇者様にはっ、私みたいな子供の神官見習いはご不満かもしれませんがっ！」

「いや、こうなったら一蓮托生だし、不満は無いんだけど……」

彼女の話によると、勇者を元の世界に戻せるのは召喚した神官だけらしい。

ただし、元の世界に戻してしまうと神官資格を失ってしまうそう
だ。

帰ることが許されるのは、魔王を倒した時のみ。

現在も魔王とやらを倒すために旅を続けている勇者もいるらしいし、適当にやってればいつかは元の世界に帰れるだろう。

「お客様、お飲み物はどういたしますか？」

いつの間にか来ていた給仕係がメニューを差し出してくる。

違う世界のはずなのに何故かスラスラと読めるのは何か不思議な力でも働いてるのか？

そう思いながら少女を見ると、むくれた顔でこれまた不思議な色のフルーツをつついている。

仕方ないな。

メニユーを読み進めていくと、どこかで聞いたような名前が書いてある。

「じゃあ、このフラガッタってのをひとつ」

「かしこまりました」

驚いたような顔をこちらに向ける少女に小さく笑って見せる。

「コーラとどれだけ違うのか、体験してみないとな」

俺の言葉に、再びむくれて見せる少女。

やがて運ばれてきたフラガッタは小さなカップに入った黒い液体。

添えられていたスプーンでかき混ぜると思っていたよりもサラサラしている。

匂いはどこことなく香ばしいような甘い香り。

カップを掴み、意を決して口を付ける。

「……苦っ！」

「コーヒーじゃねーか、これ！」

それも散々煮詰めた濃縮コーヒーの味わいだ。

「笑ってんじゃねーよ、コーラ」

メルはあの時の仕返しをするかのように笑っている。

「これはねー、ここにある糖蜜を入れて飲むですよ」

笑いながら飲み方を教授してくれる彼女に感謝しつつ、未来の事に思いを馳せる。

「魔王を倒したら、もう一度俺の世界に來い。そうしたら、もっと面白いもん飲ませてやる」

「ハイハイ、期待してますよー、勇者様」

「俺も期待してるぞ、み・な・ら・い、神官様」

再び声を張り上げる彼女を見て笑いながら、フラガッタを口に含む。

あー、コンビニ放って来ちゃったな。
間違いなく、クビだな。

まあいいか、しばらくは職業・勇者で食って行けそうだし。

口の中にはどこか苦味が混じった甘い味が広がっていた。

第二話

この世界にも夜が来るようだ。

空を見上げると、そこにあるのは紫色の夜空と黄緑色の月。

夜になっても月と空の色が反転するだけで、この目に悪そうな配色は変わらないらしい。

「……やっぱ、夜は暗いんだな」

「当たり前じゃないですか、そんなの」

街の中には街灯の類はほとんどなく、あるのは家々の窓からこぼれる明かりのみ。

それもランプやロウソクによるものらしく、ゆらゆらと揺れて非常に頼りない。

「おまえにとっては当たり前でも、俺にとっては夜でも明るいもんだよ」

「勇者様、私の事は『おまえ』じゃなくて、メルって呼んでください。でないと、返事しません」

さっき、してたじゃねーか。

「おい」

「っーん」

俺の隣でそっぽを向いてるのは、俺をこの異世界へと連れてきた張本人。

メル……何だったっけ？

まあいいや、メルと呼べって言うんだからメルでいいだろう。

「くら」

「つんつーん」

いちいち擬音を口に出すなよ。
つたく、しょうがねーな。

「……メル」

「ひゃっ！？ ひゃいつ！ 何でしょうか、勇者様！」

いや、おまえ、何だそのリアクションは？

何故、そこで声が裏返る。

俺の冷たい視線に気付いたのか、メルが言い訳がましく弁解し始める。

「い、いえ、まさかあっさりと名前で呼び始めるとは思わなくて……」

てつきり、『見習い』とか『お子様』とか呼ばれると思っていたらしい。

コイツがどんな目で俺を見てるかが良く分かるセリフだな、おい。

「そ、それに、あの……」

メルが顔を真っ赤にして、言いよどむ。
嫌な予感がしたが、ここまで来たら聞いておくべきだろう。

「何だよ？」

「……男の人に名前を呼び捨てにされるのって、結構恥ずかしいんですね。初めて知りました」

こ、このガキは……。

俺はメルのほつぺたを掴むと左右に引っ張る。。

「お前みたいなガキを女とは呼ばないんだよ！ もう少し、ドーンとかバーンな感じになってから言いやがれ！」

「ひ、ひろいでふう。わらひ、もうころもじゃないれすう」

おーおー良く伸びんなー、このほつぺた。

拙い言葉で必死に抗弁するメルを無視してほつぺの感触を楽しむ。

すると、彼女は思わぬ反撃に出て来た。

「ゆーひやはまもこーしてやう」

「ふむっ！ みやさか、ほれのこーげきをしゃかてにとられるとは」

俺の両手が塞がっているのを良いことに、メルの両手が俺のほつぺたを捕らえる。

だが、力の強さでは俺の方が断然上だ。

「こーにやったらもう、どっちぎやさきにゆてをはなしゆかしよう
びゆだ！」

「のじよむところれす！」

彼女の身体は小さく華奢で、背も低い。

ついこないだまでランドセルを背負っていたとしても不思議では
ないくらいだ。

対して俺は日本人の平均身長よりもやや高い。

メルとは頭ふたつ分は差がある。

よって、リーチの差で俺の勝ちだ！

彼女に気付かれないようにゆっくりと背伸びをしていく。

案の定、俺の手は固定されたままで彼女の手がジリジリと滑って
いく。

ずっと無言だった少女がそれに気付いたらしく、声を上げる。

「あー！ ひきょーれすよ、ゆーひゃひゃまー！」

「はっはっはー！ じべたにはいじゅりまわってまきえをみとめる
がよいわー！」

メルの手が俺のほつぺたからゆっくりと滑っていく。

俺が勝利を確信した瞬間、背後から突然の声。

「何をしてるんです、あなた方は……」

呆れるような若い女性の声に驚いて、思わず手を離す。

「「あっ」「」

その時、メルと俺の声が重なった。

「くっそー、あと少しだったのに……」

ひりひりするほつぺたを押さえながら、地面にひざまずく俺。

一方の対戦相手は飛び上がって喜び、俺の敗因となった若い女に抱きついている。

「アローラのおかげで勝つことが出来ました！ さすが、私の親友です！」

この女が前に話していたアローラらしい。

一言で言うと、美人だ。

少し切れ長の目が冷たい印象を与えるものの、美しい顔立ちであることは間違いない。

長い黒髪を後ろでまとめ、凜とした涼やかな雰囲気をかもし出している。

この点はお日様のような雰囲気のメルとは対照的だ。

背は俺より少し低いくらいか。

すらっとした体型でありながら、出るトコは出てる。

メルと同じような装飾の体型が分かりづらい服装でありながら、そこまで分かるのはメルの頭がちょうど胸の辺りに埋まっているためである。

両手は腰回りをがっちり捕らえているし。

正直、メルがうらやましい。

「……メル、メル。もうわかったから離れなさい」

俺の視線に気付いたのか、アローラがメル両肩をつかんで剥がす。

でも、もう遅い。

今の光景は俺のメモリーにすっかり焼き付かせてもらった。

ローアングルから捉えた、美少女2人の絡み合い。

俺の心のアルバムに深く刻み付けておくでしょう。

「ところで、メル。この男の方は？」

アローラの目は激しく俺を見下している。

口調は穏やかなままでありながら、限りなく視線が冷たい。

一体俺が何をしたというのだろうか？

……いや、さっきたつぷりと視姦させてもらったけど。

「はっ?! ま、まさか……」

メルが答えようとするのをさえぎるようにして、突然アローラが狼狽しはじめる。

一体、何だというのだろうか？

メルも何が起こったのか分からないという顔で首をかしげている。

「なんてこと……、私が少し都を離れていたばかりに、メルがこんな男の毒牙にかかるなんて……」

ちょっと待て。

何で俺がこんな子供に毒牙を掛けなきゃならん。

というか、俺がそんな人間に見えるのか？

「こんな事になるなら、さつさと私が……ダメ！　ダメよ、そんなの！　神の教えに背くような事……でも」

アローラは俺達を無視したまま、自問自答を繰り返す。
端から見ていると係わってはいけない人にしか見えない。

「アローラ……。私で出来る事なら何でもしますから、元に戻ってください」

メルがそんな様子のアローラに近付き、腕にすがり付く。
勇気あるな、コイツ。

親友と呼ぶのは伊達では無いらしい。

「……何でも？」

「ハイ！　何でもです！」

メルのそんな言葉にアローラの眼の色が変わる。

「じゃ、じゃあ、私とつきあつ……ダメ！　自重しなさい、アローラ！　この子の優しさに付け込む様な事をしてはいけないわ！」

再び、自分を叱り付けるように声を荒げる親友の姿に、メルが困惑の表情を見せる。

この女、もしかして……？

「なあ、メル。俺が勇者だって説明してくれ。多分、それで止まるから」

「？　はい、わかりました」

何が何だかさっぱりわかっていないメルは首を傾げながら、地面にひざまずいて祈りをささげ始めたアローラに近付いて行く。

「あの、アローラ？ この方は、私の勇者様ですよ？」

「ああ、聖女様お許しを……………勇者？」

一言呟いたきり、呆けた様な表情で動きが止まる。
それから、いくらかの時間が流れ、痺れを切らしたメルが再び呼びかける。

「アローラ？」

その呼び掛けに応えるように、アローラは顔を引き締め、メルの両肩を掴む。

「メル！ そんな大切な事はもっと早く言いなさい！」

「う、ごめんなさい」

反射的に謝るメルの姿に、ついつい口を出してしまう。

「お前が勝手に暴走したんだろうが」

「そこ！ 今は私がメルと会話しているのです！ 外野は黙ってなさい！」

へーへー、そうですか。

俺が黙った事に気を良くしたのか、再びメルに言い募る。

「それに『何でもします』なんて、若い娘が簡単に言うてはいけません！」

「そこに付け込んで、『恋人になってください』なんて言われたら、困るだろ？」

アローラが俺の方をキツと睨み付けてくる。
おー怖い怖い。

「心配しなくても大丈夫ですよ。こんな事、アローラくらいにしか言いませんし、アローラがそんな事言うはずがないじゃないですか」

さつき思いつ切り、言い掛けてたけどな。

「何か？」

「いや、別に」

アローラの冷たい視線を受け流す俺。

メルはそんな俺達の冷戦状態に気付かないまま、一つの疑問を口にする。

「それで、どうしてアローラがこんな所にいるんですか？」

言われてみればその通り。

この女も一応神官のはず。

ならば、勇者と共に旅をしていると考えるのが普通だ。

何故、こんな所に一人でいるのだろう？

「今日から、私が当直なのよ」

彼女はあっさりとそんな言葉を口にした。

「当直って何だ？」

彼女と別れた後、メルにさっきの言葉の意味を聞く。

「祭事を仕切るための当番ですよ」

この世界における神官の役割は二つ。

政事と祭事を取り仕切る事。

政治関係は上位の神官が受け持ち、下位の神官は主に祭事を受け持つのだそうだ。

祭事と言ってもそれほど大層な物ではなく、冠婚葬祭を取り仕切る役目らしい。

つまりは……。

「明日は結婚式の司会だそうです」

いや、違うだろ。

今、めちやくちゃ神官って位が軽くなったぞ。

俺としては、神主とか巫女さんとか神父をイメージしてたんだが。

「私も早く正式な神官になりたいです。私の今の夢は妹の結婚式を取り仕切ることですね」

妹がいるのか。

そういえば、コイツのこと何にも知らないな。

これから一緒に旅することになるんだし、もう少しお互いの事を知っておく必要がありそうだな。

前を歩くメルの中を見ながら、そんな事をふと考える。

こうして、異世界で迎えた初めての夜はゆっくりと更けていくのだった。

第三話

携帯電話に目を遣る。

11時50分。

既に約束の時間を2時間近くオーバーしている。

「大学の合格祝いだって呼び出したのはお前だろうが。また、寝坊でもしてんのか？ まったく」

彼女の番号を呼び出すも、何故かつながらない。
女性のアナウンスが延々と流れるだけだ。

「はあ。また充電するのを忘れてるんだな。来たら昼飯奢ってもらおう」

昼飯のメニューを思い浮かべながら、彼女を待つ。
そして、空腹を抱えながらそのまま夜まで待った。
結局、彼女が俺の前に現れる事は無かった。
そう、永遠に。

幼馴染の一人の少女、一ノ瀬真琴は俺の世界から忽然と姿を消したのだった。

「ふわあ。あー何か夢見てたような気がするんだけど」

何気なしにアゴに手を遣る。

異世界でも、やっぱりヒゲは伸びるんだな。

目覚めて最初に思ったのはそれだった。
ちなみに、神殿にあるメルの部屋に泊まったが断じて同じ布団では無かったと言っておく。

「おはようございます、勇者様」

「ああ、おはよう」

挨拶を返すと何故か顔を赤らめる少女。

「あ、あの、勇者様って、寝顔は意外と可愛いんですね」

神殿での朝のお勤めを果たしてきたと話す少女の頭に拳をグリグリと押し付けながら尋ねる。

「お前、髭剃りとか持っていないか？」

「あうう、持っていないです」

まあ、そりゃそうだ。

ガキっぽいとはいえ、こいつも女。

髭剃りなんぞ持っているわけが無い。

と思っただが、何やら化粧台の引き出しをゴソゴソと漁っている。

「ヒゲソリは無いですけど、カミソリならありますよ」

メルが右手にカミソリを取り出し、こちらに見せる。

さすがに良く見かけるＴ字カミソリではないが、直刃の真っ直ぐなカミソリだ。

使い捨ての薄っぺらとは違い、ずっしりとした重みが伝わってくる

る。

「それでいい、っていうか、ヒゲソリとカミソリは同じ物じゃないのか？」

俺の疑問に、メルは首を傾げる。

「そうなんでしょうか？」

「さあ？ 俺にもわからん」

とりあえず、何やら本を広げて調べ始めるメルを尻目に、化粧台の鏡を覗き込む。

「これくらいで大丈夫かなって」

Ｔ字しか使った事の無い俺は恐る恐る刃を肌に当てて動かす。

ゾリゾリという低い音と共に鼻の下に伸びていた無精ヒゲが削られていく。

次は、アゴだ。

顔を上げて下目使いで鏡を覗き込む。

そーいえば、何でカミソリなんて持ってたんだ、こいつ？

神官とは言うものの、現代の尼さんみたいに髪を剃ってるわけでも無し。

……やっぱり、ムダ毛処理とかに使ってるんだろっか。

………

「痛っ」

上の空でそんな事を考えてたのが悪かったのだろう。
アゴの下に鋭い痛みが走る。
指で拭くと赤い液体が付着する。

「あつ！ 血が出てるじゃないですか？！」

メルがそんな俺の様子に気付いて、懷から取り出したハンカチの
ような布を傷口に押し付ける。

「いや、そんな大層なケガじゃないって……」

その手を外そうとつかむ俺に、メルが怒る。

「ダメです！ 少しだけ我慢しててください！」

少女はそう言うと、目を瞑る。

様子を見ると、何やら口の中で呪文のような物を呟いているよう
だ。

まさか、魔法とか？！

そつえば、一応ファンタジーな世界なのだ。

しかも、神官といえは癒しの呪文くらいは使えるはず。

俺はウキウキしながらその瞬間を待った。

……長いな、オイ。

いつまで掛かるんだよ。

口の中の呪文はまだ続いている。

かれこれ3分くらい経っただろうか？

「ハイ。もう大丈夫ですよ」

軽やかな声と同時に布が外される。

傷口を触ると、もう血は止まったようだ。

でも、小さな痛みは残っている。

これは、ひよっとすると……？

「なあ、今のつて？」

俺の疑問の声に、彼女が答える。

「神の奇跡ですよ」

「魔法、じゃないのか？」

呟きを聞きつけたのか、少女は俺の言葉を一笑に付す。

「何言ってるんですか、勇者様。魔法なんて普通の人間に使えるわけがないじゃないですか。もっと現実を見てください」

まさか、ファンタジー世界の住人に「現実を見る」なんて言われる日が来るとは思わなかった。

少しへこむ。

まあいい、さっき思い付いた事の検証を試みよう。

ズボンのポケットに入れておいた携帯電話を取り出す。

貧乏フリーターには不釣り合いな最新機種、ストラップには通販で見つけたソーラー電池付きだ。

店長が、連絡が取れないと不便だからと持たせてくれた物なのだが、以前持っていた携帯のデータを入れてたりするのは店長にはナイショだ。

「あつ、何ですかそれ？」

「後で見せてやるから、とりあえず今の『神の奇跡』ってのをもう一度やってくれ」

渋る彼女に携帯をちらつかせながら交渉する。

「うーわかりました。その代わり、後でちゃんと見せてくださいね！」

再び目を瞑る彼女を見て、時間を合わせる。

合図と共に呪文のような物を唱え始めるのと同時にボタンを押す。

しばらくして、呪文が終わり彼女が目を開く。

同時にもう一度ボタンを押す。

画面表示は『00:03:11』。

うん、間違いないな。

「ただの止血法じゃねーか、こら」

興味深そうに画面を覗き込む神官の頭を平手ではたく。

「そんな、人の頭をポンポン叩かないでください。馬鹿になったらどうするんですか」

心配するな、もうそれ以上はならねーよ。

「何ですか？」

「何でもねーよ」

不審な眼差しでこちらを見つめてくる少女としばし睨み合う。
が、バカバカしい事この上ない。

「約束ですよ。早くそれを見せて下さい」

目を逸らした俺に詰め寄るように、少女の顔が近付く。
うわ、結構キレイな顔してんな。
そういえば、前にコイツとキスしたんだよなあ……。

「今のは全然『神の奇跡』じゃねーだろ。だから、約束は無しだ」

つい照れ隠しにそんな事を言ってしまう。

「あつ、ひどいです。さっきのはシェリルさんに教えてもらったんです。『神の奇跡』って聞きましたもん」

シェリル？

また違う名前が出てきたな。

「そのシェリルってのは、どんな奴なんだよ？」

そう問い掛けると、目を瞑って天を仰ぐ。
思い出そうとしているようだ。

「私より3つ下で、背は同じくらい。基本的に無口で、えと……人をからかうのが好きな人です」

「自分で解かってんじゃねーか。からかわれてるんだよ」

俺の言葉に思うところがあつたのか、うなだれてしまつたが、すぐに顔を上げて叫ぶ。

「わかりました！　じゃあ、本当の『神の奇跡』を見せてあげます！」

そして、連れて来られたのは大きな公園のような場所。
この街の住民が思い思いの場所で自然を満喫しているようだ。

「ここなら、人に迷惑掛ける事ありません」

公園の中央に進んで行くと、人々がすつと避けて行く。
遠くからこちらを見付けると、遠巻きに眺めるようにして避けて行くのだ。

神官って実は嫌われてるんじゃないだろうか？

そう思ったが、中には地面に平伏している人間もいる。

この街の人間は傍目には日本人と同じような容姿をしているようだ。

俺の見分には日本の公園の風景とほとんど大差ない。

ただ、生えている木々が見た事無い種類だったりするだけだ。

「この辺りでいいでしょうか」

立ち止まった俺達を、人々が遠巻きに見守るように輪を作る。
俺としてはすぐ人目が気になるんだが、少女は全く気にならない

い様子で両手を左右に広げる。

「参考までに聞きたいんだが、何をするつもりだ？」

「空を飛ぶんです！」

自信ありげに言い切ったメルは、再び高揚感を覚える。
空を飛ぶ、か。

確かに人が空を飛ぶなんぞ、物理法則に反している。
それこそまさに『神の奇跡』と呼ぶにふさわしいだろう。

「よし、やってみる！」

「はいっ！」

元気に答える彼女の姿はどこか輝いて見えた。

「なあ、参考までに聞きたいんだが、恥ずかしくないのか？」

メルは何故か左右に広げた手を上下にパタパタと動かしている。
いわゆる、子供がよくやる鳥の物真似のような感じが。
あれから数分経ったが一向に空を飛ぶ様子が無い。

「鳥をイメージしてるんです！ 黙っててください！」

神の奇跡って……。

ふと見回すと人々はこの異様な光景にも一言も発していない。
むしろ、平伏する人間が増えたほどだ。

俺はこの拷問のような時間が早く終わる事を祈っていた。

『あー、神様。聞いてるなら、この馬鹿を空に飛ばさせてやって下さい』

現実から逃避するように目を伏せると、人々の驚愕の声が響く。顔を上げると、目の前には地面から10cmほど浮いた少女の姿。

真っ赤な顔をして必死に腕をバタつかせている少女が叫ぶ。

「ほら、勇者様！ 飛んでますよ、飛んでますからね！」

「あ、ああ……そうだな」

何かこう、目の前の光景に圧倒されて何も言えない。

凄いと思うより以前に、正直恥ずかしい。

だが、周りを見た俺はさらに驚かされた。

遠巻きに見ていた人々が皆、平伏しているのだ。

中には涙を流して祈っている者もいる。

さすがに、この状態は耐えられない。

「よし、わかった。俺が悪かった。さあ、帰ろう！」

地面に降りて、荒い息をつく少女を抱えてひた走る。

未だにひれ伏す民衆の間を突っ切ってとにかく走り続ける。

「ゆ、勇者様！ 一人で歩けます！」

「いいから！ 疲れてるんだろ、帰ったらちゃんと約束守るから！」

「本当ですか?!」

途端におとなしくなった少女を両手に抱え、メル部屋へと急ぐのだった。

「勇者様!　なんか小さい人が入ってます!」

写真を初めて見た人間はそんな感想を持つのか。
布団の上でへばりながら、彼女の声に耳を傾ける。

「あれ?」

少女の声に疑問が混ざる。

まさか、壊したんじゃないかなろうな。

「なんだ?」

画面を覗き込むと、そこには一人の少女の姿。

「ちつ。まだそんなもんが残ってたのか」

メルの手から携帯を取り上げ、データを消そうとするもどうしても踏ん切りが付かない。

「その人……?」

メルの質問に、俺はつい声を荒げてしまう。

「違う！　こんな奴知らねーよ！」

それは嘘だ。

だが、彼女はもういない。

3年前のあの日、あの約束の日、彼女は俺を置いてどこかへ消えてしまった。

「……もう、どこにもいないんだよ」

俺の気落ちした様子を見かねたのか、少女が話し始める。

「あの、この人、私見た事ありますよ」

きっと俺を元気付けようとしてくれているのだろう。

彼女の心を思うと、さっきの自分の態度が子供の癪癪のようにも思えて恥ずかしくなってくる。

「ああ、悪かった。そんな嘘を言ってまで元気付けようとしなくてもいいよ」

「ですから、嘘じゃありません！　イチノセマコトさんですよね？」

あれ？　俺、こいつに名前教えたっけ？

「……何で知ってたんだ？」

「勇者様です！　シエリルさんの勇者様。77番目の勇者様なんで

すよ！」

彼女の言葉を聞いて、俺の運命が音を立てて動き出したのを感じた。

第四話

「いらっしやいませー」

店に入ってきた客が棚をしばらく吟味した後、商品を手に取り、レジカウンターにいる俺の元へとやって来る。

傷薬と読める文字列が記載された箱は意外と軽く、どうやって使うものか何が入っているのか全く見当がつかない。

減多に使った事の無い算盤に手間取りながらも勘定を済ませ、商品を軽く梱包すると、客が店から出て行くのを見送る。

「ありがとうございますー」

それにしても、算盤か。

小学校の算数の時間に必修科目としてあるんだよな。

あの頃は『計算機もある時代にこんなもん必要無いだろ』と鼻で笑ってたもんだが、まさか実用する日が来るとは思わなかった。

でも、これ多分日本製……だよな。

外国じゃ別の形してるって聞いた事があるんだけど、妙に見慣れた形してるし。

何となく物思いに耽りながらパチパチと珠を弾いていると突然後ろから肩を叩かれる。

「うわっ！　　つと何だ、店長か」

驚いて振り向くと、渋面の中年の男の姿。

今日働かせてもらっているこの店の店長だ。

「張り切つてるとこ悪いが今日はもう店じまいだ。こんな客が少ないじゃ商売にならん」

今日の給金だと数枚の銅貨を渡される。

「すまんが明日からは来なくてもいいよ。客として来るんなら少しはおまけしてやるから」

店長はそう言いながら店の奥に行ってしまった。

手のひらの上に乗った数枚の銅貨を眺めてそつとため息をつく。

「またか……」

店の外で客引きをしているはずの少女の所へとぼとぼと歩く。

扉を開くと目が痛くなりそうな紫色の月の光、そして聞こえてくる少女の声。

「新鮮な保存食、もしもの時の備えにこのお店の商品はいかがですかー！」

新鮮な保存食って何だ。

いや、ニユアンスはわからなくもない。

だが根本的に何かが間違っているような気がする。

「何でも揃う便利な旅のお店です。冷やかし歓迎、買ってくれるならさらに大歓迎！」

まばらにしか通らない人が少女を見た途端に道の反対側へと距離を取りながら避けて行く。

やっぱコイツ、客引きにも向いてないな。

そう確信しつつ、一心不乱に声を張り上げる少女の後頭部をはたく。

「ひゃうつ！ 突然何するんですか、勇者様！」

「もう店じまいだよ。それとまたクビだ」

手の中の銅貨を手渡すとさすがに気落ちした様子。

いつもは輝いて見える金色の髪も、今日はどこかくすんで見える。

「勇者様、愛想悪いですもんね……」

金髪碧眼の少女がぼそりと呟く。

「人聞きの悪い事を言うな。明らかにお前のせいだろうが」

売り子をさせれば、客がレジから引き返し商品を棚に戻して去って行く。

呼び子をさせれば、客が逃げるように遠巻きにして去って行く。

何でまたこんなに避けられているのか、不思議でたまらない。

神官という存在が民衆に煙たがられているのか、はたまたコイツ自身に何か問題でもあるのだろうか。

どうにも理解できない。

「こんなんじゃ明日一日食えるかどうかも怪しいな」

「国庫から援助が出せればこんな事をしなくても良かったんですけど……」

申し訳なさそうに目を伏せる少女の頭をポンポンとはたく。

「出せないもんはしょうがない。明日はもっと割りのいいバイトを探そうぜ」

「ハイ！ 頑張りましょう、勇者様！」

元気に声を張り上げて帰り道を急ぐ少女の背中を見ながら、俺はそつとためいきをついた。

「本当に真琴がこの世界にいるのか?!」

3年前に姿を消した幼馴染がまさか、こんな異世界にいるとは考えもしなかった。

当然だ。

俺自身、ここに連れて来られなきゃ異世界なんて物が実在するなんて思いもしなかった。

「は、はい。以前、シェリルさんに紹介されましたから間違いありません」

「よっしゃ！ 早速早苗さんに連絡して……って、圏外に決まってるじゃねーか。バカか、俺は？」

電話帳を開いて真琴の家の電話番号を呼び出した所でハタと気付く。

「つか、今は俺が行方不明者扱いなんじゃないか？」

店長怒ってんだろーな。

何せ、店は開いたままで店員の姿は無いし、パンの空き袋とコーラの空のペットボトルが残されてるんだもんな。

下手すりゃ警察沙汰か？

真琴がいなくなった時もエライ騒ぎになったからな。

『あの子ももう大人なんだからそのうちひよっこり帰って来るよ』

そう言いながら、泣きそうな顔で笑っていた真琴とよく似た風貌の早苗さんの表情が忘れられない。

俺もあの後すぐに家を出る事になったから、あれから早苗さんに会ってないけど元気にしているだろうか？

「あの、マコトさんは勇者様の恋人ですか？」

感慨に耽っていた俺を、その言葉が現実に取り戻す。

「……ただの幼馴染だよ、そんなんじゃない。強いて言えば、同年のお姉さんと言った所かな」

「はい？」

不思議そうな顔をする少女に彼女の事を話す。

真琴の家はいわゆる大家族で、彼女は7人兄妹の末っ子だという事。

家が隣だった事や母親同士が友人だった関係でいつもそこで遊んでいた事。

末っ子だったせいもあるのか、誕生日が2ヶ月早いという理由でいつも俺を弟扱いしていた事など。

「俺に妹が出来てからはそっちに掛かりきりになったけどな」

「妹さんですか……」

そういえば、コイツも妹がいるとか言ってたな。

俺の妹と言えば、こないだ高校に推薦で受かったとかメールがあった。

いつも真琴の後ろを追いかけていたあいつももう15才なんだよな。

俺と同じく自分の妹の事を考えているのだろう、目の前の少女はどこか憂いを帯びた表情を浮かべている。

「どこに行けば、会えるんだ？」

俺の質問にメルは慌てたように答える。

「は、はい。隣のシュベールの街です。歩いて3日くらいの距離です。あの子、元気にしてるかな？」

うん、どうも勘違いしてるようだ。

「お前の妹じゃなくて、真琴の居場所を聞いてるんだが？」

「あ。す、すみません。……でも多分シュベールに行けば会えると思います」

「根拠は？」

「シェリルさん、『王都にいとせつつかれてウザイから、隣町で余生を過ごす事にする』と別れ際に言っていましたから」

「そうかわかった」

とりあえず、そのシェリルって奴は一発殴つとこう。
俺はそう心に決めたのだった。

「しかしだ。いざシュベールに行こうにも先立つ物が無いと来たもんだ」

理由は簡単だ。

ここに来た時に王様から言われたように、既に援助するだけの余裕がこの国にないのだ。

メルも見習いなだけあつて、給金は微々たる物らしい。
もう自力で儲けるしか手立てがない。

「せっかく異世界まで来たのに、やってる事が向こうと全く変わらないのが何とも……」

「勇者様、グチばかり言っていないで良い仕事を探してください」

食堂で今日の晩飯を食べ、掲示板に張り出された雇用募集の走り書きに目を通す。

ただ仕事を探すだけならそれほど苦労は無い。

しかし長期に拘束されるのは問題がある。

勇者である以上、いつかは旅に出なければならぬのだ。
差し当たっては隣町に行きたいだけなのだが。

「あの、これなんてどうでしょう?」

メルがその中の一つを指差す。

『荷物運び 日払い 一日銀貨2枚』

うじゃうじやとミミズが這い回ったような見た事も無い文字なのだが、何故か意味は判る。

しばらく読み進んで結論を出す。

「却下」

荷物運びなんてきつそうな仕事を、この娘がこなせるとはとても思えない。

もちろん、俺一人で受けようにもこの世界は勝手がわからなすぎる。

具体的に言うと、地理が全く解からない。

訳のわからん地名を出されてそこまで荷物を運べと言われた所でどうしようもない。

メルに教えてもらうという手もあるが、どうもコイツはそういう点で頼りにならない気がする。

「あ、これなんてスゴイですよ」

弾んだ声に誘われて指差す張り紙に目を向ける。

『若い女性求む。年齢15〜22才。明るく楽しい職場です。一日金貨1枚以上可』

……滅茶苦茶怪しい。

大体そもそもの条件に合わんだろ。

「一日に金貨1枚なんて仕事、他にはありませんよ」

声を弾ませる少女は明らかに妹よりも年下だ。

それにこれがどんな仕事なのか、まったくわかっていないらしい。

「こいつはお前みたいなお子様向けの仕事じゃない。却下」

目の前にある頭をポンポンと叩きながら言つと、頬を膨らませて抗議してくる。

「ですから私はお子様じゃありません！ こう見えても……」

メルが何かを言いかけた時、突然後ろから声を掛けられた。

「あら？ メルと……勇者様。こんな所で何をしているの？」

俺を呼ぶ時に微妙に躊躇しやがったぞ、おい。

振り返ると、こんな街の食堂には明らかにそぐわない、真っ白な神官衣に身を包んだ若い女性の姿。

周囲の男性客がちらちらと目を遣つては彼女の姿を見ている。

「アローラこそ、どうしたんですか？」

質問に対して質問で返すなど教わらなかったのだろうか、このお子様は。

けれど、アローラは気を悪くする事も無くその質問に答える。

「明日の結婚式の打ち合わせで来ていたのよ」

目を向けた先には談笑する数人の老若男女の姿。
新郎新婦らしい、若い男女の姿もその中にある。

「それで、あなたたちは？」

「……隣町に行きたくて旅費を稼いでる所だ」

俺がそう言うと、あからさまに馬鹿にしたような表情を向けてくるアローラ。

……なんか無性にムカつく。

「勇者様ってばひどいんですよ。この仕事をするって言ったら『お前みたいなお子様には無理だ』って！」

そこまで言っただろ。

メルという言葉聞いて明らか敵意を含んだ瞳で俺を見ていたアローラだったが、少女が示す張り紙を見て表情を一変させる。

「……！！」

ゆっくりと俺の方に顔を向けるアローラと小さな声で少女に聞こえないように気を付けながら、頭の上で会話する。

「……だからな。他に上手い説得の仕方があるならお前が何とかしろ」

『こないかがわしい仕事の募集なんて最初からメルに見せないで下さい』

無茶な要望を向けてくるアローラに、全てを丸投げする俺。

しばらく逡巡した彼女は意外な提案を持ち掛けて来た。

「仕方ありません。あなた達には私の仕事を手伝ってもらう事にします」

「なあ、メルは奴、受付に置いて来て良かったのか？」

翌朝になって街の小さな結婚式場に連れて来られた。

結婚式は教会で挙げるものだと思っていたが、この国では少々事情が異なるらしい。

教会というか、神殿はこの国の中心であり国王のいる場所でもあり政治の中心でもある。

そんな所に易々と一般の国民を入らせる事は無いのだという。そのため、神官が直々にあちこちに出向いて結婚式を執り行っているそうだ。

下位の神官が祭事を執り行っているのも上位の神官がわざわざ出向くのを嫌がるからであって、明確に役割が決められているわけでは無いらしい。

どこの世界でも上司が部下に面倒な仕事を押し付けるのは変わらないようだ。

「見習いとはいえ、仮にも神官です。それくらいの方は取り仕切ってもらわねば困ります」

別にそういう意味で言っただけじゃないんだが。

本来の受付として座ってた女の子が妙に縮こまっていたのを思い出しながら、前を静々と歩くアローラの背中に目を遣る。

彼女は意外にも100人いる神官の中でも上位である第21位と

いう立場に位置するらしい。

上位から序列が決まっっていて、数字が小さければ小さいほど高い地位にいるのだそうだ。

「そういえば、何でアイツ見習いなんだ？ 『神の奇跡』って神官なら誰でも使えるわけじゃ無いんだろ？」

前にメルが見せてくれた『神の奇跡』。

あまりにも間抜けな姿ではあったが、一応空を飛ぶ所を見せてくれた。

色々聞いてみると他にも目の前のアローラのように癒しの力を持つ者や炎を操る者もいるらしい。

しかし、話を聞くに付け全くそれらの『奇跡』を起こせない者ですら神官になれるのだそうだ。

そんな現実には、神官の資格という物が何なのかわからなくなってきた。

「ふう。あの子ったら……あれほど『奇跡』を見せびらかしてはダメだと言いつけていたのに」

ため息混じりにそう言うと、彼女は足を止めてこちらを振り向く。

「あなたは、どうすれば神官になれるとお考えですか？」

『神の奇跡』が使えるか否かが条件に含まれないなら、家柄とかだろうか？

世襲制で親が神官を引退したら子供が後を継ぐという図式が頭に浮かんだ。

「親が神官だ、とか？」

「確かに私の母は神官でしたが、世襲制というわけではありません」

なら、何だ？

神のお告げか？

「正解は親もしくは後見人の『地位』と『資産』です」

うわ、何かファンタジーな世界で一番聞きたくない言葉を聞いたような気がする。

こんな異世界まで来て、『金』と『コネ』に出会うとは。

あー思い出すなあ。

高校を卒業してからのあの挫折の日々。

『金』も『コネ』も無い一介の高卒者に押し掛かる現実社会の厳しさ。

結局就職試験に落ち続け、食うにも困ったあげく通りがかったコンビニで財布の中の小銭を数えながらぶっ倒れ、店長に同情されて働かせてもらっていたわけだが。

「ど、どうしました？」

「いや、少し現実負けそうになっただけ。ふふ……ふふふっ」

向こうに帰ったらどうしよう。

職場放棄した手前、もう店長に合わせる顔が無い。

また無職の日々に逆戻りかよ、この野郎。

異世界に来てまで就職活動に勤しんでいる状況におかしさすらこみ上げてくる。

「……で、メルはどっちが足りないんだ？」

あの世間知らずな所といい、どこかの箱入りお嬢様のような雰囲気しか感じられない。

少なくともコネの方はクリアしてるようにも思えるんだが。

だからと言って金の方とも思えない。

自分で金を稼いだ経験が無いのだろう、あまりにも世間ズレしていない。

つまりは親は裕福であるという証拠だ。

「メルの容姿に気付く所はありませんか？」

容姿？

そういえば、この国の人間は黒髪に黒い瞳と異世界のくせに日本人に良く似た風貌をしている。

目の前に居るアローラも整った美貌を持つとはいえそれは変わらない。

けれど、メルは違う。

金色の髪に青い瞳、日本人とは明らかに異なった造形の整った目鼻立ち。

「彼女の母親は海の方この異国の出身なのです」

「……それがアイツが神官になれない理由なのか？」

俺の問いに、アローラは目を伏せる。

そして消え入るような声で言葉を紡ぐ。

「……理由の一つではあります」

それが全てでは無いらしい。

少しばかり容姿が異なるからといってそれで将来が決まるというのはおかしいと思う。

けれど、この異世界は俺の知っている日本とは明らかに違う文化体系を持つ国なのだ。

それが俺にはどうにもすることが出来なくてなんとなくもやもやする。

「神官には一生なれないってことが」

俺の呟きをアローラが否定する。

「いえ、それはあなた次第です」

「俺？」

どうして、そこで俺が係わって来るんだ？

俺の困惑に気付いたのか、彼女はさらに口を開く。

「魔王を討伐すれば褒賞として、勇者とその従者である神官に『何でも一つ願い事を叶えられる権利』が与えられるのです。おそらくはあの子はそれを当てにしている……」

「ちょっと待て。今初めて聞いたぞ、ソレ」

そういえば俺、この世界に来てからほとんど何にも説明されて無いぞ。

いきなり異世界に連れて来られて、王様に魔王を倒して来いとか言われて、真琴がこっちの世界に居る事がわかって、でそこに行く

ためには金が必要で。

「本物の馬鹿か、俺は。そういえば、そこに至るまでの事情とか全然聞いてないじゃん」

「……それは確かに馬鹿ですね」

頭を抱える俺に、アローラが冷たく追い討ちを掛けてくる。
そうこうしているうちに開場の時間が来たようだ。
人々のざわめきが聞こえてくる。

「っと、早く準備しなきゃマズインじゃないのか？」

「準備でしたら昨日のうちに済ませてあります。あなたのようない馬鹿」ではありませんので」

やっぱり、この女ムカつく。
いちいち『馬鹿』を強調するアローラに、俺はそんな思いを抱いたのだった。

何だかんだ言ってもやっぱり美人だよな。

祭壇に向けてひざまずき、祈りを捧げるアローラの姿について見惚れてしまう。

先程までの嫌味たっぷりの表情などおくびにも見せず、真剣な表情で祈りの言葉を紡いでいる。

「やっぱりアローラはかっこいいです。私もいつかあの場所に……」

傍らでメルがそんな言葉を漏らす。

「本当に神官になりたいんだな」

「当然です。何せ私の夢なんですから」

その夢のためには魔王を倒すしかない、か。

こんなガキのくせにまさかそこまで強い想いを内に秘めているとは思ひもなかった。

それに付き合わされる俺は正直たまったもんじゃないが。

「あー、そういえば聞いたぞ」

キラキラとした表情でアローラを見つめるメルの左の頬をつまむ。

「な、なんれふか？」

「魔王倒したら、何でも願い事を叶えてもらえるんだってな。俺は初耳だぞこの野郎」

メルはその言葉に目を逸らす。

俺への返答を考えているようだ。

しばらくして、ゆっくりと口を開く。

「だっへ、聞かれまふえんでしたふあら」

「あるかどうかからん物を聞けないだろ、普通は」

「ふおれもほうでふね、えへへ」

頬をつままれたまま、照れくさそうに笑うメル。

「はっはっは、笑ってごまかせると思うなよ」

「ご、ごめんなひやいですう」

未来に待ち受けているだろう様々な困難とは裏腹に、どこまでも平和な俺達であった。

第五話

「で、シェリルってのはどんな奴なんだ？」

神殿へと向かう道で前を歩くメルに尋ねる。

「第100位の神官ですけど、素行は悪い、門限は守らない、儀式の最中に居眠りする、とどうしてあんな娘が神官になれたものか不思議に思います」

俺は一応、メルに尋ねたつもりなだけだな。

何故かメルの隣を歩くアローラが俺の問いに答える。

ところで、お前の勇者はどうしたんだ？

「良い人ですよ、すごく」

メルが隣の親友の言葉を否定するかのようにつぶやく。

「例えば？」

「食事に肉や魚が出た時に野菜と取り替えてくれたり……」

それは良い人とは言わない。

そういえば、メルは肉や魚を一切食べない。

どんなに小さな欠片であつたとしてもきれいに取り除いてから口にする。

てっきり神官の教義の中に肉食の禁止とかがあるのかと思っていたが、その話を聞く限りではどうやら違うようだ。

「メル」

アローラが静かに咎めるように少女の名を呼ぶ。

「命を頂いてるんでしょう。わかってます」

口を尖らせるメル。

何度も同じように好き嫌いを諫められたのだろう。

二人のやり取りにはどこことなく慣れたような雰囲気が見受けられる。

「他には？」

場の空気を変えるように、続きをうながす。

「私の知らなかった事をいっぱい教えてくれました」

以前推測した通り、メルは相当な箱入りお嬢様だったらしい。

食堂での注文の仕方や生活必需品を揃える店すらもシェリルから教わったそうだ。

「そういえば、街の子供たちの遊びでお金を掛けてサイコロ？でしたか、その目を当てる遊びが流行ってるそうで。私もシェリルさんと遊んでみたんですけど負けてばかりで」

お前、それ騙されてるから。間違いなく賭博の一種だから。

そう口にしようかとも思ったが、キラキラとした笑顔を見ると口に出すのとはばかられる。

「その次の日にはお菓子を抱えきれないほど買って来て、アローラには内緒だつて……あつ！」

「へえ？ 私には内緒なんですか。まったく、あの娘ったら……」

アローラは少しむくれたような表情を見せていたがやがてふっと微笑みを浮かべる。

「安心しました。私がいなくともメルがしっかりやっているようで」

どこをどう聞いてもしっかりしているようには聞こえなかったが。

「アローラとシェリルさんには本当に感謝しています。2人のおかげで私はここまで来れたんですから」

ここまでも何も、まだ街から出てすらいないんだが。

「こら。まだ始まったばかりでしょう？ 礼を言うのは全てが終わってからよ」

当たり前といえば当たり前。

けれど、この2人には俺なんか知らない歴史があるんだろう。笑い合う2人の姿を見ると、何か俺忘れられてないだろうかという気持ちがひしひしと湧き上がって来るが気のせいだろうと思いたい。

「着きましたよ、勇者様。……勇者様？」

良かった。俺、忘れられてなかった。
人知れず、感動に心を打ちふるわせる。

「……どうせ、前を歩く私たちの腰付きでも見て妄想してたんでしょっ？ いやらしい」

「待て。その言葉には断固抗議させてもらっ」

「えっそんなんですか？」

あっさり信じるなよ、お前は。

アローラを盾にするように後ろに隠れる少女に指を突き付ける。

「前に言っただろうが。俺はお子様には興味無いんだよ」

「私も前に言っただと思いますけれど、お子様じゃありません！」

「ふう。おふたりの仲が良いのはわかりましたから、ここが神殿の前であることを忘れないでください」

ふと周りを見渡すと、神殿に集まる人々の視線が痛い。
中には露骨に俺を睨みつけて来る奴すらいる。

「なあ。何で俺ばかり睨まれてんだ？」

何度も何度もどこへともなく頭を下げるメルを横目に、呆れた様子のアローラに尋ねる。

「そんな事、メルが可愛いからに決まってるでしょう？」

お前、もう俺に対しては隠す気ないのな。

「あ、あのっ、ごめんなさい！ お騒がせしました！」

相変わらず、何故か人々は少女を遠巻きにしながら通り過ぎていく。

そんな人々に必死に謝るメルを見ながら思う。

どうやら、この少女にはまだまだ俺の知らない秘密があるのだらうと。

それが何かまではわからないが。

神殿の中に一步足を踏み入れる。

そこはもう外の世界とは隔絶された空間だった。

壁に施された精緻な彫刻の数々、祈りを捧げる少女の姿や数多くの何とは判別しがたい多種多様の動物達が一つの方角に向かって頭を下げている様子が描かれている。

外には多くの人々が行き交い喧噪に満ち溢れていたのに対し、ここはあまりにも静粛で厳かな雰囲気包まれていた。

「ここは？」

「ここは祈りの間です。神殿に入る者はここで神に祈りを捧げる事になっています」

そう言いながらメルは彫刻に描かれた少女と同じように祈り始める。

両膝を地面につき、両手のひらを合わせるように組んで頭を垂れる。

見ると、メルから一步下がった位置でアローラも同じような姿勢

で祈っている。

「やっぱ、俺もしなきゃいけないよな？」

「当然です、と言いたいところですけど、仮にも勇者であるあなたは私達とは作法が異なりますので、ここでは頭を下げるだけで結構です」

仮にも、という言葉にちょっとムカつきながらも、何となく手を合わせながら頭を下げる。

その方向には装飾の施された祭壇があった。

そこに祀られている女性をかたどった像は真っ白な石で作られ、見る者に微笑みを投げ掛けている。

おそらくあれが聖女様なのだろう。

「あれが聖女様？」

そう問い掛ける俺に、祈りを終えた2人が教えてくれる。

「はい。この世界に危機が訪れた時、勇者を召喚して共に戦い、破滅の危機から救ったと伝承に残されています」

「神より授かった剣を持ち、この世すべての闇を切り払った勇者様と聖女様の物語はこの国では子供でも知っています。ふう……」

俺の顔を見ながらため息吐くんじゃねえ。

自分でもどうして選ばれたのかわからないんだからしょうがないじゃないか。

「あーそうだ。肝心のお前の勇者様はどこにいるんだよ？ 夜毎迫

って逃げられたのか？」

好みで選んだという話だからきつとメルのような華奢な見た目の少女なのだろう。

何も分らない異世界に連れてこられたうえにこんなのに付きま
とわれたら逃げるのも当然だ。

出会ったことも無いもうひとりの勇者に対する同情の念は尽きない。

「な、な、な、何という事を言うんですかつ、失礼な！」

「そうです！ アローラは身持ちが固いつて有名なんですから訂正
してください！」

アローラは真つ赤な顔で狼狽している。意外とこちら方面には初心らしい。

一方のメルは……果たして意味がわかって言っているのだろうか？

身持ちが固い、転じて、男つ氣が無い。こいつの場合はそれにプラス女好きという事実が組み合わさるのだから身持ちが固いのは当然といってもいい。

「いや、だってなあ。こいつの好みで選んだんだろ？ 今頃寂しがつて泣いてんじゃないか？」

目の前の少女が同じような立場になったらきつと泣くだろう、というか泣いてたし。

初めて出会った時の泣き顔を思い出す。

けれど、2人は俺の言葉にきよとした表情を浮かべる。

「あの男がそう簡単に泣くわけがないでしょう。それで泣くような

可愛らしい人間だったらどんなにいいか」

「あはは……あの方の泣き顔はちよつと想像できないですね」

あの男？ 男なのか？

「えっ？ あれ？ 男？ でも好みで選んだって……ふむぐっ！」

「ちよつとこつちへ！ この勇者様と大事なお話があるから待ってね、メル」

口を押さえられ有無を言わず物陰へと連れ込まれる俺。

メルに声が届かないだろう距離まで離れると声をひそめながら言う。

「何か勘違いされているようですが私は女好きじゃありません。あくまでもメルが好きだけです」

「いや、一緒じゃん、それ」

「違います！ そこの女とメルを一緒にしないでください！」

恋は盲目、とはこういう事を言うのだろうか。

声をひそめながら怒鳴るという離れ業を見せた女に気圧されるようにして頷く。

「じゃあ、あれか？ わざわざ男を選んだのはメルを欺くため？」

「欺くだなんて……。あの人はアレでその、少しはカッコいい所もあるんですよ？ どこか私に似た匂いもしますし」

あー何か。男は別腹っすか。何かもうやってらんねー。

少々やさぐれた気分になりながらメルの元に帰る。

「お話しは終わりましたか？」

「ああ。もういいからちゃっちゃと済ませようぜ。何か疲れてきた」

元々、ここに来たのは何か理由があつての事。

路銀集めだつてまだ半ばなのだ。こんな所で油を売つてゐる暇はない。

「ではこちらへ」

案内された先には大きな扉。

重そうな木製の重厚なドアを2人掛かりで押し開いた彼女達は俺に中に入るよう促す。

「神託の間です」

石で造られた殺風景な部屋の真ん中に輝く真つ白な光の柱。

目測で直径1メートルくらい、高さは3メートルといった所か。

この世界に来て初めて見たファンタジーな光景に心が躍る。

……まあ、メルが空を飛ぶ所とか見たけど。あれは正直ノーカウ
ントだ。

「ここで何をするんだ？」

疑問を投げ掛ける俺にメルが答える。

「勇者の武器を神様から授けられるんです。さあ、あの光の中に手を」

俺はドキドキする心臓の高鳴りを感じながらそつと光の中に手を差し入れた。

第六話

「金貨8枚で売ってくれ」

「いや、そんな事を急に言われても」

路銀も貯まり、いよいよ隣町に出かけようとする前日の事。

旅に必要な物を買いかもうと、先日働いた店に入った俺に掛けられた最初の言葉がこれである。

「勇者の持ち物ってのは貴重だね。模倣して作られた物もあるにはあるんだけど……」

説明しながらも店主の目は俺の手元に注がれている。

その説明でこの前の算盤については見当がついた。

どういふ状況かはわからないが過去に算盤を持ち込んだ勇者がいたのだろう。

あるいは最初の勇者のように商売として売り始めた人間もいたのかもしれない。

「ここで働いたよしみで少し色付けるからさ。頼むよ」

ここまで懇願されても正直困る。

なんでこんな物にそれほどの値打ちがあるのか不思議でたまらない。

大体、前にここで働いた時は半日ほど働いてせいぜい銅貨5枚。それが現代の日本においてどれだけの価値かはわからないがその晩の食事2人分で消えた。

この事実を踏まえると銅貨は多く見積もっても一枚500円ほどだろう。

「金貨8枚か……」

この国には金銀銅の3種類の通貨があるようだ。
でも正直言うと、俺はまだ銅貨しか見た事がない。
どんなレートでどれだけの価値がある物なのかさっぱりわからない。

「8枚で足りないなら9枚でどうだ！」

店主は俺の呟きを催促ととったらしい。

知らない所で値段が釣り上がって、今さらどのくらいの価値があるのかなんて聞けやしない。

仕方なくそれで手を打とうとした時、突然後ろから声が掛る。

「待ちたまえ、少年」

少年というのは俺の事だろうか。

確かに童顔だと言われる事もあるが一応これでも21なんだが。
後ろを振り向くと縁なしの細身の眼鏡を掛けた男がいた。

年の頃は20代後半といった所か。

短く切り揃えた黒髪に黒い瞳、端正な顔立ちに身長はおそらく180は超えている。

黒いスーツに身を包んでいる所から見て彼もおそらく俺と同じ世界の人間だろう。

どこかで見た事があるような気もするがこんな知り合いはいないはず。

とりあえずイケメンメガネとでも呼んでおこう。

「少年。ここは私に任せてもらえないだろうか」

イケメンメガネはこれまたこの舞台から出てきたのかと思うほどの芝居がかった口調で話しかけてくる。

これの価格交渉についてだろう。特に断る理由も任せる理由も無いんだがどうしたものか。

「ありがとう」

この世界には人の話を聞かない人間しかいないらしい。

沈黙を了承と受け取ったのか勝手に割り込んでくる。

「じゃあ、俺は適当にそこらの棚を見てるから終わったら呼んでくれ」

しかしまあ、何でこんな物をそんなに欲しがるんだと思いつつ。

手に持ったままのボールペンを胸ポケットに差し込んだ。

「金貨１２枚で手を打ったよ」

悔しそうな顔を見せる店主に２本１組１００円で買った安物のボールペンを手渡す。

代わりに受け取った金貨は思っていたよりも薄くとても小さい。女性の横顔が彫られた、せいぜい１円玉ほどのそれは手の中でシヤラシヤラと涼しげな音を立てる。

「じゃあ報酬な」

1枚を摘みあげてイケメンメガネに渡すと何故か驚いた顔で見返してくる。

何か問題でもあるのだろうか。

「ありがたく頂いておくよ」

そう言って笑う男と連れだって店を後にする。

「君も勇者だろう？　いつここに来たんだい？」

「1週間くらい前かな」

僕はひと月くらい前だよ、と男は話す。

他の勇者と出会うのは初めてだという彼の態度はとても友好的だ。

俺も同じ世界の住人と出会えたことでやっと聞きたい事を聞ける事に気付いた。

「ところで、金貨1枚って何円なんだ？」

「なるほど。君は金貨の価値を知らなかったわけだ。道理で簡単に手渡すと思った」

さすがに正確に円に換算出来るものではない、と前置きされた上での大体の値段を聞いた。

「じゅ、じゅじゅ、10万円?!」

「いや、多く見積もってだよ？　大体5万円から10万円くらいの相場だと思う」

1本50円のボールペンが最低でも60万円、ひよっとすると120万にも届くかもしれない。

それを聞いて思う。旅費を貯めるために今までこつこつと働いてきたのは何だったのかと。

「最初からこいつを売っとけばよかった」

アローラに出会ってからというもの、散々足元を見られて朝に夕にこき使われるわ。

今日だってこうして1人で買い出しに行かされて。

メルは手伝うとは言ってくれたけれど、今頃はあの女に適当に言い包められている事だろう。

実際にここいるのが俺一人なのがその証拠だ。

「これは返した方がいいかね？」

イケメンメガネが先程の金貨を人差し指と親指とで摘んで見せる。

「いや、いいよ。最初の言い値と比べれば3枚は得してるんだし、そのくらいは」

金銭的に余裕があると寛容にもなる。

10万円と考えるとアレだがたかだかコイン1枚くらいと考えればそれほどでもない。

「金貨に刻まれた女性は初代の聖女様らしいね。当代の聖女様にはお会いした事はないけど、きっと綺麗な方なんだろうね」

「ん？ 聖女つてのは今でもいるのか？」

神殿で見た真っ白い石像を思い出す。

ありとあらゆる生物の祈りを受け、微笑みを返す聖女。
現実そんな人物が存在するのだろうか？

「選ばれてから一度も神殿から出ることなく神様に祈りを捧げている、という話だよ？ まあ僕も聞いたただだから本当かどうかは知らないけど」

聖女様が。俺が出会った神官といえばメルとアローラの二人だけ。

お子様なメルはさておいても、二人とも美人と呼んで差支えはない。

それを束ねる女性ともなればかなりの美人に違いない。しかも世間を知らない深窓のお嬢様と来れば、言葉面だけであの彫刻のようにひれ伏してしまいそうだ。

「ところで、君はどこに行くんだい？」

「隣町。知り合いがいるかもしれないんだ」

こちらの事情をかいつまんで話す。

行方不明になった友人がどうやら過去に勇者として連れて来られたらしい事、そしてここに連れて来られた経緯も。

「パンとコーラを奢ったら連れて来られた？ それはまた何とも」

青年の顔に苦笑が浮かぶ。

そっという彼はどうなのだろう？

「街角で演説してたんだよ。『勇者を探してます』って何か面白そうだったから見てただけだよ」

彼をここに連れて来た神官も見目麗しい美女らしい。

当然ながらそんな女性が街角に居ればガラの悪いのに絡まれることもあるだろう。

それを助けたのがこのイケメンメガネだったらしい。

「ここに集まった人間の中で僕が一番勇気がある、と言われたよ」

勇気はある。確かにその通りだ。俺なら関わり合いになるのを恐れて最初からそんな演説する女には近付かない。

「受賞式に行く途中だったんだけど断りきれなくてね」

だからこんな服装なんだ、と笑う。

黒いスーツと受賞式、ひと月前にあった事件を唐突に思い出した。

「ちよつと待った。その顔どこかで見た事があると思ったら、くるやき繰夜京先生？」

しんやき繰夜京、新進気鋭の作家としてデビューと同時に何とかいう賞に受賞したかと思ったら突然の行方不明。

不思議な服装の女性と歩いているのを見た、チンピラに絡まれていた女性を助けようとしていた等の目撃情報から新興宗教との関わりやチンピラの報復などが予想されてしばらくワイドショーを賑わしていた人物の名だ。

あまりにも何度も放送されるものだから芸能関係に疎い俺の記憶

にも残っている。

「おや？ 僕の名前も有名になったものだね」

渦中の人物がまさか異世界に勇者として連れて来られているとは誰一人として予想しなかっただろう。

真琴もそうだが、意外とこっちに來ている行方不明者は多いのかもしれない。

何しろ俺も含めて101人の勇者がこの世界にいるのだから。

「勇者様——！！！」

視線の先には広場の噴水の脇で手を振るメルの姿。

その隣にはぶすつとした顔で俺の隣の男を見つめるアローラ。

「ひょっとして……彼女が君の神官かい？」

その問い掛けなら俺も今しようと思っていた所だ。

なるほど確かにあの生真面目な神官なら道端で演説もしかねない。

「しばらくよろしくな、先生」

「ああ。これから長い付き合いになりそうだね」

改めて握手を交わした俺達は二人のそばへと歩み寄る。

「二人していきなり手をつないだりして、もうそんな関係になったんですか？」

眉間に皺を寄せたアローラがそんな事をのたまう。

「少なくともお前には言われたくない」

メルの方にちらりと視線を向けるとアローラは気色ばむ。

「なっ?! 私はただ純粹に……!」

純粹にねえ? 何の事かわからずに視線を彷徨わせているメル。その手はアローラの服の裾を握っている。恋人同士というより子連れの母親といった様相が。

「まあまあ。これから旅する仲間なんだ。気楽に行こう」

先生がいきり立つアローラを宥める。

「ええと、何がなんだかわかりませんけど仲良くしましょうアローラ?」

「そうそう。いつまでも喧嘩腰だと嫌われるぞ?」

誰に、とは言わない。本人以外は気付いている。

再び顔を真っ赤にさせるアローラを放つというメルの手を取る。

「あ」

俺以外の三人が同時に声を上げる。何で先生まで?

「ほら、さっさと行かないと日が暮れるぞ?」

「分かりました！ 分かりましたからその手を放しなさい！」

「これはなかなか面白い事になりそうだね」

何も言わずに俺の横を歩くメルとは対照的に後ろの二人は姦しい。

「そうそう。アローラ、さっきの質問に対する答えだがね。 そうなればいい、と思ってるよ」

「では、私達は共同戦線を張れると言う事でよろしいですか？」

さっきまでとは打って変わって声をひそめる彼等に不審な物を感じながら、街の門へと歩を進めるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1094f/>

絶対運命曲線

2010年10月15日01時26分発行